

(2017年6月20日発行)

日本口腔顔面痛学会 理事長 佐々木啓一

広報委員会委員長 小見山 道

今回は、平成29年6月11日(日)に行われました平成29年度口腔顔面痛ベーシックセミナーについて、日本歯科大学附属病院の原 節宏先生に報告していただきます。

平成29年度口腔顔面痛ベーシックセミナー参加報告

日本歯科大学附属病院 顎関節症診療センター 原 節宏 (広報委員)

本年度の口腔顔面痛ベーシックセミナーは、70名の参加のもと慶應義塾大学病院にて開催された。昨年から新設された本セミナーは新入会員および非会員など、口腔顔面痛にあまり触れたことのない方を対象とした入門・レビューセミナーに相当する。口腔顔面痛に関する基礎から臨床まで必要とされる知識と臨床トピックスがコンパクトに盛り込まれており、日頃より口腔顔面痛の治療にあたっている会員の方にも十分満足の得られる内容であった。

まず、司会進行の村岡渡先生から、昨年より一新した学会主催による各種セミナーの年間スケジュールについてのオリエンテーションがあり、口腔顔面痛初心者の方がステップを踏んで、知識と実践を深めていける企画プログラムの概要について紹介があった。

午前の部では、和嶋浩一先生から「口腔顔面痛の魅力と概念」と題して、対応に苦慮する非歯原性歯痛・顎関節症・三叉神経痛・頭痛など、広く疼痛疾患全般に適用できる魅力ある学際的分野であることを、口腔顔面痛の全体像と、痛みの発生メカニズムの概要や疫学情報などから解説があった。続いて、「必須の痛みのメカニズムと薬理作用」と題して日本大学歯学部の新田雅路先生から、痛み情報伝達に関して、受容器、受容体、神経線維、情報伝達物質、シナプス伝達などの基礎知識を整理し、その伝達を遮断する各種薬物の作用機序について詳しく解説があった。続いて、「痛みのための医療面接とは」と題して日本大学松戸歯学部の大久保昌和先生から、何をどのように医療面接から得て、どのように判断をしていくかについて、AAOP(米国口腔顔面痛学会)の年次総会の最新情報をまじえて、わかりやすく解説があった。



会場風景

休憩をはさみ、自分が「咀嚼筋由来の歯痛とは」と題して、比較的遭遇する確率の高い筋・筋膜性疼痛由来の非歯原性歯痛について、解剖学的構造や、いまだ仮説の多い病態生理などについてビデオ教材を供覧しながら解説した。続いて、日本大学歯学部の今村佳樹先生から、「歯科で生じる神経障害性疼痛」

と題して、ビデオに記録された症例を通して医療面接、定性感覚検査、聴覚検査などを駆使して三叉神経痛、帯状疱疹痛、帯状疱疹後神経痛などの代表的な口腔顔面領域の神経障害性疼痛の診断方法、治療の重要ポイントなどについて解説があった。

お昼をはさんで午後の部では、「痛みのメカニズムに基づいた薬物療法の実際」と題して、川崎市立井田病院の村岡渡先生から、日常臨床で遭遇しやすい4種の症例を供覧しながら疼痛構造化問診から始まる診察と、そこから導き出される治療法としての運動療法や薬物療法について、さらに治療後の経過について具体的に解説があった。続いて、「歯科で役立つ頭痛の知識」と題して、大久保昌和先生から歯痛や口腔顔面痛を呈する片頭痛や緊張型頭痛などの一次性頭痛をはじめ、顎関節症による頭痛、二次性頭痛など、その特徴や診断のアルゴリズムについて、web上でビデオ配信されている動画情報をまじえて詳しく解説があった。



休憩をはさんで、和嶋浩一先生から、この5月に米国フェニックスで開催されたAAOPの参加レポートのあと、口腔顔面痛の診断には欠かせない「臨床診断推論」について総論の解説があった。さらに続いて、村岡渡先生の指導のもと、症例を通して臨床診断推論の疑似体験をすることができた。臨床診断推論については、初めて耳にする受講者も多く、さらに深く学びたい方のために、今後企画されているセミナーについて紹介があった。最後に、確

認のための小テスト、および受講後の感想などのアンケートを行い、全プログラムを終了した。

本年度はポスター、フライヤーなどによる年間企画の広報活動にも力をいれており、そのかいあってか、本セミナーは70名の多くの受講者のうち、25名が非会員の方の参加であり、この数は年々増加している傾向が窺える。また、この参加をきっかけとして、さらに詳しく知識と実践を身に着けようと、入会される方も多く見受けられた。口腔顔面痛に対する一般歯科医師の関心の深さを示していることを実感し、当学会の事業として、多くの方に口腔顔面痛に対する正しい理解を深めることができる場を提供する役割があることを強く感じるセミナーとなった。